

〔教育実践研究〕

「地域基礎看護学卒業研究Ⅰ」を体験したことによって  
学生自身が感じている成長

松下 光子      片岡 三佳      藤澤 まこと      普照 早苗  
黒江 ゆり子      北山 三津子      森 仁実      米増 直美  
坪内 美奈      三宅 薫

The Development of Ability Distinguished by Students who Have Experienced in the  
“Community-based Fundamental Nursing Graduate Research I”

Mitsuko Matsushita, Mika Kataoka, Makoto Fujisawa, Sanae Fusho,  
Yuriko Kuroe, Mitsuko Kitayama, Hitomi Mori, Naomi Yonemasu,  
Mina Tsubouchi, and Kaoru Miyake

I. 目的

地域基礎看護学講座では、地域基礎看護学講座で卒業研究を実施した学生の卒業時の到達目標を明らかにするための取り組みとして、平成17年度に次の2つの調査を実施した。すなわち、平成16年3月に看護学教育の在り方に関する検討会報告として出された「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」<sup>1)</sup>で示された看護実践能力の項目を枠組みとして用いて実施した、卒業研究Ⅰにおいて学生が体験している看護実践能力の項目を確かめる調査（調査1）<sup>2)</sup>と、卒業研究Ⅰを通して、学生自身が成長したと感じていることを調べる調査（調査2）である。調査1では、教員から見た学生の看護実践体験を主に挙げたが、卒業研究を体験した当事者である学生自身が卒業研究Ⅰを体験したことを通して身につけたと感じている能力は何かを捉えたいということで、調査2を同時に企画した。本稿では、この調査2の結果について報告する。

本学における卒業研究は、卒業研究Ⅰと卒業研究Ⅱから構成される。学士課程4年次前期に履修する卒業研究Ⅰでは、各学生が選択した看護学領域において看護実践を行い、その中から看護実践上の課題を見出し、その見出した課題について、4年次後期に履修する卒業研究

Ⅱにおいて各学生が課題解決を目指して看護実践を行い、その経過及び成果を研究的にレポートにまとめるというものである。学生は、3年次の領域別実習での実習体験を基盤としながら、さらに卒業研究での実習を通して看護実践能力を身につけていることから、その内容を明らかにし、到達目標を明確にする必要がある。

本調査の目的は、卒業時の到達目標を検討する際の資料として、地域基礎看護学卒業研究Ⅰを体験したことにより学生自身が成長したと感じている内容を明らかにすることである。

II. 方法

1. 対象

平成17年度に地域基礎看護学卒業研究Ⅰを選択した学生30名を対象としたが、調査協力の得られた者はそのうち11名であった。なお、地域基礎看護学卒業研究Ⅰは、さらに領域ごとに4つのグループに分かれるため、協力が得られた学生数は、グループごとに見ると、グループ1（公衆衛生看護領域）14名中2名、グループ2（訪問看護領域）5名中1名、グループ3（精神看護領域）5名中2名、グループ4（継続看護領域）6名全員であった。

これらの学生が体験した平成17年度地域基礎看護学

表1 「地域基礎看護学卒業研究Ⅰ」の目的・目標および各グループ（領域）の実習内容

<b>&lt;目的&gt;</b>	
生活の営みのなかで人々の健康を支えるための看護活動を自ら実践することを通して、看護実践に必要な基礎的能力を培うとともに、社会における看護の特質を明らかにする。さらに、卒業研究Ⅰでの学修を通して、後続する卒業研究Ⅱにおける個別の研究課題を明らかにする。	
<b>&lt;目標&gt;</b>	
1. 地域における生活者としての対象のもつヘルスケアニーズ（看護課題）を明らかにして看護を計画・実施・評価・修正する方法を学ぶ。	
2. 看護の展開にあたっては、ヘルスケアニーズに対応できる（看護課題の解決に関連する）関連機関・人々と協働し、質の高いヘルスケアサービスを提供する体制を整備する方法を学ぶ。	
3. 地域特性に応じた看護のあり方と方法を対象者の立場にたって追究することができる。	
4. 1～3を通して、看護実践上の課題を明らかにする。	
<b>&lt;各グループ（領域）の実習内容&gt;</b>	
グループ1	（公衆衛生看護領域）：市町村保健センターにおいて、家庭訪問、関係者等からの聞き取りにより地域の特性・健康課題を捉え、住民と解決を検討する地区活動を体験。1事例担当し継続家庭訪問。
グループ2	（訪問看護領域）：訪問看護ステーションにおいて、受け持ち利用者への看護過程を展開。家族を単位とした援助、他職種との連携、ケアマネジメントを含め体験。
グループ3	（精神看護領域）：精神科病院において、受け持ち患者への看護過程を展開。家族への援助、施設内外の他職種との連携、地域の社会資源把握を含めて行う。
グループ4	（継続看護領域）：慢性疾患病棟・外来において、受け持ち患者への看護過程を展開。病棟、外来、家庭訪問での援助。退院時必要な社会資源を調べ紹介。

卒業研究Ⅰの目的・目標と各グループ（領域）の実習内容は、表1の通りである。卒業研究Ⅰは、4月中旬～7月中旬までの週3日13週間で現地実習と学内学習を行う。この他に、地域基礎看護学卒業研究Ⅰを履修した全学生を対象として地域特性に応じた看護のあり方と方法の追究を目的とした実習として、岐阜県内の過疎地域診療所および後方支援病院における2日間の実習とその前後の学内学習を行った。

## 2. データ収集方法

情報収集は、卒業研究Ⅰが終了した7月中旬に実施した。4つのグループ（領域）ごとに、担当教員が文書と口頭にて、調査の目的・方法を学生に説明し、協力依頼を行った。依頼内容は、「卒業研究Ⅰで自分自身が成長した部分について箇条書きで自由に書いてください。」とし、協力が得られる学生は、メールにて各自の卒業研究指導担当教員に結果を送付するよう依頼した。学生からのメールを受け取った各教員は、大学の共有サーバー内に設置した結果を集約するためのエクセルファイルに、学生が箇条書きにした1項目を1セルとしてデータを貼り付けることとし、グループ（領域）ごとに結果を表に集約した。担当教員がエクセルファイルの表にデータを貼る段階では、学生名や学籍番号は用いず、グループ（領域）ごとに学生に通し番号をつけることとし、データを講座全教員で共有する際は、どの学生のデータであるかわからないようにした。ただし、一人の学生の意見は

ひとまとまりにできるように箇条書きの項目ごとに、（学生の番号）－（項目番号）として、1－1、1－2という番号を付けた。学生の番号は、便宜上の番号であり学籍番号とは異なる番号とした。

## 3. 分析方法

全学生のデータをまとめ、記述された内容の意味内容が似たものを分類・整理した。データの分類・整理は、1名の教員が分類したものを卒業研究の各グループ（領域）から集まった他の教員3名とともに再度検討した。また、結果は講座の全教員で共有した。

## 4. 倫理的配慮

学生への調査の説明と協力依頼は、卒業研究Ⅰの終了時に、文書を用いて口頭でグループ（領域）ごとに教員が学生に説明した。調査の目的・方法、拒否・中断の自由、協力するかしらないかが成績評価および今後の対応に不利益をもたらさないことを説明した。

## Ⅲ. 結果

11名の学生が記述した学生自身が感じている成長の内容は、表2に示した。11名の学生から64件のデータが抽出され、それらは、14のカテゴリに区分できた。以下、件数の多い順にカテゴリを説明する。

件数が増えたと多かったものは、どの項目を重点的に捉える必要があるのか考えることができるようになったなどの「1. 対象者の現状について情報収集し、理解す

表2 卒業研究Ⅰで自分自身が成長した部分

	カテゴリ・記述内容	件数
<b>1. 対象者の現状について情報収集し、理解する力がついた</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭訪問を行い、本人・家族の援助ニーズを捉えるために必要となる情報に対する項目を訪問前にみんなで話し合ったことで難病患者に対する訪問時にどのようなことを捉えたらよいかということが分かるようになった</li> <li>・家庭訪問を行い、本人・家族に対し援助ニーズを捉えるために必要となる情報の聞き方について訪問を重ねるごとに学ぶことができた</li> <li>・患者さんからの情報収集で、必要な情報の種類と方法を考えながら会話をすることで、欲しい情報はきちんと得られるようになった</li> <li>・どの項目を重点的に捉える必要があるのか考えることができるようになった</li> <li>・患者との関わりのなかで、これまで会話に頼ったコミュニケーションをしてきたことに気づいたことによって、表情や態度といったところから患者の状態の観察・把握をすることができ、対象理解をしていくときに視野が広がったこと</li> <li>・捉えてきた項目をそれぞれ関連づけ、全体的な視野を持ち対象を考えられるようになった</li> <li>・患者理解において、疾患や生活歴だけでなく、あらゆる面から総合的に患者を捉えて理解する姿勢を持つことができた。患者を理解する力はついたと思う</li> <li>・本人と家族の関係性を捉え、それぞれの生活・思いを把握することができようになった</li> </ul>	8
<b>2. 対象者の個性、生活を理解し援助することを学んだ</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・患者さんの疾患や疾患への思い、生活背景、家族背景など、対象理解の大切さを学んだこと</li> <li>・慢性疾患を持つ患者さんが入院中から退院後の生活を考えることの重要性を学んだこと</li> <li>・在宅での生活の仕方にもさまざまなものがあり、看護にもそれに合わせて同じものはないため、その人にあった看護を考えていかなくてはならないことを身をもって知ることができた</li> <li>・在宅看護において、その人の生活を捉えながらかわっていくことができるようになった</li> <li>・入院前の生活や、退院後の生活について具体的に把握し、聞くことができた。それが、患者さんも主体的に考えていくことができると考えたし、実際に患者さんも細かく教えてくれて考えていくことができた</li> <li>・対象の退院後の生活を考えながら、共にセルケア方法を考え、指導できた</li> <li>・食事や薬の管理において、患者さんの能力や理解度に合わせて一緒に考えていくことができ、個性を大切にしたい関わりができたこと</li> <li>・健康教育では患者さんの知りたいと思っているところに即して進めていくことが大切で、教えると言うより患者さんとともに考えていくと言う姿勢が大切なのだった</li> </ul>	8
<b>3. 看護計画に基づき主体的に対象者とかかわり、看護を実践できた</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分自身のアセスメントやケア計画に基づいて主体的に患者と関わる事ができた</li> <li>・日々のアセスメントを行い、計画立案・実施を行った。また、評価を行い、適時修正を行った</li> <li>・病態を理解し、身体的変化を見て日々のアセスメントができた。また、それに合わせた計画の修正や変更ができた</li> <li>・患者さんのタイミングに合わせて関わっていくことが効果的であると実感した。そのため、患者さんの体調や気分に合わせて関わり方を変えていくことができた。このために、看護記録や看護師さんに様子を聞いておき、検温に行ったときに実際に話してみても患者さんと今日何やるかを一緒に考えるようにした</li> <li>・清拭や陰洗、洗髪といった看護ケアにおいて、うまく行えたかどうかということが、そのまま患者の反応として返ってきたので、毎回反省し学習することで技術面での成長もできたと思う</li> <li>・看護目標として最初に立案したものにこだわり過ぎず患者の状態をみていくことで、表出していなかった残存機能や力を発見できることがあることが分かったこと</li> <li>・看護計画を立てるとき、そのケアの必要性や根拠を考えて計画し、それが本当に対象に必要であるのかどうかを考えながらケアを提供することが出来た</li> </ul>	7
<b>4. ケアチームの中で自分の役割を考え行動できた</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護師や医師、臨床心理士などがいるチームの中での学生の役割を考えるようになり、その上で、患者と関わる事ができた</li> <li>・毎日のカンファレンスで、自分のしたいこと・迷っていることなどを素直に話し報告することができたので、少しだけチームの一員として機能できたと思う</li> <li>・必要時、スタッフの方に助言を求めたり、対象に何らかの変化があった場合などにすぐにスタッフの方に伝え、密に情報を共有することができた</li> <li>・スタッフとのコミュニケーションがとれ、受け持ち患者さんに関してはチームの一員としてケアができるようになった</li> <li>・看護師の協力を得ながら、医師や栄養士と連携がとれるようになった</li> <li>・チームの一員として、スタッフに情報を伝えることができた</li> <li>・看護実践の中で、主体的に自分のすべきことを考え、現場の看護師や他職種と関わっていったこと</li> </ul>	7

表2 卒業研究Ⅰで自分自身が成長した部分(つづき)

カテゴリ・記述内容	件数
<b>5. 自分の行動をコントロールし周囲とのかかわりの中で行動できるようになった</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今やるべきことと後でもできることの区別をつけ、自分自身で調節しながら無理なく、実習をしていくことができるようになった</li> <li>・困ったときは、自分から指導者さんや先生方に相談を持ちかけたり、意見を求めたりできた。適時、助言を求められるようになった</li> <li>・同じ病棟の他学校の実習生とも情報交換ができ、自分がいないときの患者さんの情報も得ることができた。2週間だけのかかわりの実習生とも上手く関係性が構築することができたと思う</li> <li>・一緒に実習へ行っているメンバーとお互いに励まししながら支えあうことができ、自分に余裕がないときでも自分のことだけでなく、他者のことを思いやる気持ちが持てた</li> <li>・自分たちのことだけでなく、自分のとった行動によってどのようなことが起こってくるのかなど、今後のことを予想して行動が取れるようになった</li> <li>・病棟に実習生として1人だけで入っていくことに初めはとても不安だったけれど、自分なりにスタッフの方や患者さんと上手く距離をとり関係性が作っていったと思う</li> </ul>	6
<b>6. 対象者の話を聴くことの重要性を実感し、実践していく姿勢を身につけた</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・話を聴くことが大切であるということ、それを通して対象理解を深めることが出来ることを学んだ</li> <li>・入院の一時だけ関わるのではなく、退院してからも継続して患者さんに関わって話を聞いていくことが大切だということを実感し、このことに気付くことができた。そのために、外来でもきちんと患者さんの話を聞いていこうと思う</li> <li>・相手を尊重して話を聴くという姿勢をとることができるようになった</li> <li>・3年生の領域実習では、患者さんに踏みこんだ話をなかなかうまく聞き出すことができなくて困ったが、今回の実習では、話の中でさりげなく聞くのではなく、きちんと向き合って話すことを心がけたら聞くことができた。いろいろなやり方で試してみるようにできた</li> <li>・対象の思い、考えを傾聴し、思いを話せる機会を作った</li> </ul>	5
<b>7. 対象者とコミュニケーションをとり関係を築くことができた</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生として受け持ち患者さんに敬意を持って関わり、患者さんとの信頼関係を築いていけるように努力できたこと</li> <li>・対象と積極的にコミュニケーションをとり、信頼関係を築くことができた</li> <li>・患者さんとコミュニケーションをとるときに、3年次の実習より目的を持って意図的に会話ができるようになった</li> <li>・対象の性格上、関わりが少し困難であったが積極的にコミュニケーションを図ることができた</li> </ul>	4
<b>8. 対象者の現状を受け止め、相手に即したかかわりができた</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・その日の対象の状況にあわせ、このケアが適当であるかどうかを見極めながら対象の意志や意向を尊重した関わりをもつことができた</li> <li>・対象の気持ちや思いを否定せず、受容的な態度で関わり共感的に接することができた</li> <li>・看護者の患者さんに対して分かりやすい説明や指導が患者さんにとって必要で、分かりやすい説明ができるように心がけたこと</li> <li>・担当患者さんだけでなく、他の患者さんのことや場を考えて、担当患者さんに関わることもできた</li> </ul>	4
<b>9. さまざまな対象者の状況について理解できた</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象の日常生活について把握し、今までの生活でどのようなことが困難であったのかを理解することができた</li> <li>・長期的に関わることで、慢性疾患を抱える患者の心情や背景、患者を取り巻くさまざまな問題から、慢性疾患を抱えながら生活するという点について学べたこと</li> <li>・難病患者と家族・独居の高齢者の男性の生活実態や思いについて学ぶことができた</li> <li>・難病患者と家族・独居の高齢者の男性の援助ニーズを捉えることができた</li> </ul>	4
<b>10. 看護者－対象者を意識した看護実践を実施・看護実践を振り返った</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・患者さんにとって必要な看護と、自分がしたいと思っている看護が必ずしも一緒ではないことを考えられるようになった</li> <li>・一方的に看護を押し付けるような看護を自分がしてしまっているかもしれないと、自分の看護を振り返られるようになった</li> <li>・自分が実施している看護や関わりを客観的に評価し、それが患者に与えている影響や自分が持っている看護力を考えながら実習することができた</li> </ul>	3



表2 卒業研究Ⅰで自分自身が成長した部分（つづき）

カテゴリ・記述内容	件数
<b>11. 家族へのかかわりについて実施した・考えた</b> ・領域別実習では、家族と関われる機会が少なかったが、卒研Ⅰでは家族との関わりを多くもち、家族に対してどのような声かけや配慮が必要であるかについて考えながら行動することができた ・退院後の生活で血糖コントロールしていけるように働きかけるには、患者さん本人だけでなく、家族へも関わっていくことが必要であると考えることができた。実際には卒研Ⅰでは家族へ関わるができなかったが、卒研Ⅱでは関わっていきたい ・在宅看護での看護において家族の意向と患者さんの意向の食い違いなども考慮しながら看護を考えていけるようになった	3
<b>12. 個人情報保護、安全なケア提供について再認識した</b> ・患者さんの個人情報の保護について今まで以上に気をつけるようになった ・患者さんに安全にケアを提供することができなかったこともあって、安全にケアを提供する重要性を再認識するとともに、看護行為の注意点を振り返ることができたこと	2
<b>13. 疾病や制度についてしっかり学んだ</b> ・糖尿病について詳しくなった ・難病に対する医学的な知識・岐阜県の事業・制度についてより深く理解することができた	2
<b>14. 連携について学んだ</b> ・関係者の連携の実態や課題について学ぶことができた	1

る力がついた」と、対象の退院後の生活を考えながら、共にセルフケア方法を考え、指導できたなどの「2. 対象者の個別性、生活を理解し援助することを学んだ」の各8件であった。

次に多かったものは、自分自身のアセスメントやケア計画に基づいて主体的に患者と関わることもできたなどの「3. 看護計画に基づき主体的に対象者とかかわり、看護を実践できた」と、看護師や医師、臨床心理士などがいるチームの中での学生の役割を考えるようになり、その上で、患者とかかわることができたなどの「4. ケアチームの中で自分の役割を考え行動できた」の各7件であった。次いで多かったものは、今やるべきことと後でもできることの区別をつけ、自分自身で調節しながら無理なく、実習をしていくことができるようになったなどの「5. 自分の行動をコントロールし周囲とかかわりの中で行動できるようになった」の6件、さらに、相手を尊重して話を聴くという姿勢をとることができるようになったなどの「6. 対象者の話を聴くことの重要性を実感し、実践していく姿勢を身につけた」の5件である。

さらに、4件あったカテゴリが3つあった。対象と積極的にコミュニケーションをとり、信頼関係を築くことができたなどの「7. 対象者とコミュニケーションをとり関係を築くことができた」、対象の気持ちや思いを否定せず、受容的な態度で関わり共感的に接することがで

きたなどの「8. 対象者の現状を受け止め、相手に即したかかわりができた」、難病患者と家族・独居の高齢者の男性の生活実態や思いについて学ぶことができたなどの「9. さまざまな対象者の状況について理解できた」であった。次いで、3件あったカテゴリが2つあった。一方的に看護を押し付けるような看護を自分がしてしまっているかもしれないと、自分の看護を振り返られるようになったなどの「10. 看護者－対象者を意識した看護実践を実施・看護実践を振り返った」、在宅看護での看護において家族の意向と患者さんの意向の食い違いなども考慮しながら看護を考えていけるようになったなどの「11. 家族へのかかわりについて実施した・考えた」であった。次いで、2件あったカテゴリが2つあり、患者さんの個人情報の保護について今まで以上に気をつけるようになったなどの「12. 個人情報保護、安全なケア提供について再認識した」と、難病に対する医学的な知識・岐阜県の事業・制度についてより深く理解することができたなどの「13. 疾病や制度についてしっかり学んだ」であった。最後に、1件あったカテゴリが1つあり、関係者の連携の実態や課題について学ぶことができたという「14. 連携について学んだ」であった。

#### IV. 考察

1. 卒業研究Ⅰだからこそ力がついたと考えられる部分  
 学生自身が卒業研究Ⅰを通して成長したと感じていた

内容として卒業研究Ⅰだからこそ特徴的な意見と考えられたものは、「4. ケアチームの中で自分の役割を考え行動できた」と「5. 自分の行動をコントロールし周囲とのかかわりの中で行動できるようになった」であった。これらの項目から、学生は、周囲の状況をみながら自分の立場を考え行動できるようになったと言える。3年次の領域別実習では、教員が学生にかかわる時間が長く、実習内容などが教員によって事前に細かく整えられた中で行われる長くて2週間程度の実習であるが、卒業研究Ⅰでは、実習期間は4月後半から7月初旬までと長く、教員のかかわりも学生自身が現地指導者と相談しながら主体的に実習できるように支援することが主となる。各実習施設に配置される学生数も少なく、学生は、主体的に現地の実習指導者と相談をしながら実習を進めていく必要に迫られる。そのような状況に置かれることで、学生は、自分でそのときの状況を判断し、状況にあわせた対応をすることを身につけていっているのではないかと考えられる。

また、該当件数が最も多かった項目では、「1. 対象者の現状について情報収集し、理解する力がついた」と「2. 対象者の個性、生活を理解し援助することを学んだ」であり、次いで多かった項目の一つは、「3. 看護計画に基づき主体的に対象者とかかわり、看護を実践できた」であった。学生は、主体的に対象者とかかわり、対象者を理解することができるようになった、また、対象者の個性にあわせて対応していく力がついた、自らの看護計画を修正することや実践を振り返って検討することができたと感じていた。これらのことも、主体的な取り組みを求められる状況下で看護実践を行うこと、また、実習期間が長く、計画立案、実施、評価、計画の修正という看護過程を繰り返して体験することが可能であることから実現できたのではないかと考える。

さらに、「6. 対象者の話を聴くことの重要性を実感し、実践していく姿勢を身につけた」、「7. 対象者とコミュニケーションをとり関係を築くことができた」、といった項目も該当件数が多く、看護活動の始まりである対象者とかかわりに対して、学生は自分なりにできたという自信をもつことができていた。

以上のことから、卒業研究Ⅰでは、学生は、教員がすべてを整えた中で実習するのではなく、自ら行動して実

習を進めていくことをせざるをえない状況に置かれることで、周囲の状況を捉えて、自ら考え行動する力をつけていっていると言える。この力は、社会人として、看護職として勤務する際の基盤になっていくと考えられる。しかし、教員としてどのような学生への支援が必要かを考えた場合に、学生が主体的に行動できているのでそれでよい、とばかりはいえない。教員は、学生が看護過程を的確に主体的に展開する力をつけるための指導を確実に行うことが常に重要であると考えられる。看護職としての基本となる考え方、知識、技術を学生が身につけ、その上で、状況に応じて応用していく力をつけることができるように、教員は、学生が看護過程を的確に展開する力をつけることができるようしっかりと指導することが必要であろう。

## 2. 「地域基礎看護学卒業研究Ⅰ」の目標に照らした検討

次に、今回学生が成長したと感じていた内容を、「地域基礎看護学卒業研究Ⅰ」の目標に照らしてみると、目標1. 地域における生活者としてのヘルスケアニーズ(看護課題)を明らかにして看護を計画・実施・評価・修正する方法を学ぶ、に該当し、かつ個人の看護対象者への援助に関する内容が中心であった。また、目標2. 看護の展開にあたっては、ヘルスケアニーズに対応できる(看護過程の解決に関係する)関連機関・人々と協働し、質の高いヘルスケアサービスを提供する体制を整備する方法を学ぶ、については、ケアチームの中での自身の行動という部分は出てきている。しかし、ヘルスケアサービスの提供体制については、制度を理解したという意見が1名から出たのみであった。さらに、目標3. 地域特性に応じた看護のあり方と方法を対象者の立場に立って追究することができる、については、対象者の立場に立ってという部分は、「8. 対象者の現状を受け止め、相手に即したかかわりができた」などが関連してくると考えられるが、地域特性に応じた看護のあり方と方法という部分は、言及されていない。

これらのことから、学生は、個々の看護対象者への援助については、自身の成長を感じやすいが、ヘルスケアサービス提供体制の整備や地域特性に応じた看護のあり方と方法といった視野を広げた取り組みについては、実感することが難しいと考えられる。個々の看護対象者への援助は、看護過程の展開を繰り返す体験ができるが、

体制の整備や地域特性に応じた看護といった取り組みは、時間がかかり広範囲の関係者に働きかける必要がある活動であることから、学生が卒業研究Ⅰの間に、自ら試み、その取り組みを振り返り、評価し、活動の修正を行うことは不可能といってもよい体験である。また、学生が自ら試みることができるとしても、それは、ごく一部分の取り組みになる。このような学生が体験できることの特徴を考えると、その特徴を踏まえた上で、何をもって目標達成とするかについて教員側が明確にする必要がある。また、学生が学びを実感できるような教員のかかわり方も検討する必要がある。

## V. おわりに

今回の調査では、回答者数が少なく、一部の学生の体験を捉えることができた状況である。また、地域基礎看護学講座の各グループ（領域）の違い等については、検討をすることはできなかった。しかし、あげられたカテゴリは、ケアチームの中での行動、対象理解、看護過程の展開、対象者との関係づくりなど主体的に看護実践を行うために必要不可欠な項目であり、いずれのグループ（領域）でも身につけてもらいたい内容である。いずれのグループ（領域）でも、今回の回答をもとに、学生が自身の成長を実感することを促す教員のかかわりを強めることで、卒業研究Ⅰの体験の意味をより深めることができるのではないかと考える。

また、今回は卒業研究Ⅰを終了した時点での学生の状況を調べた。卒業時の到達目標を検討するためには、さらに卒業研究Ⅱでの学生の学修内容を調べる必要がある。

## 文献

- 1) 看護学教育の在り方に関する検討会：看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標（看護学教育の在り方に関する検討会報告），平成 16 年 3 月 26 日
- 2) 松下光子，片岡三佳，藤澤まこと，他：「地域基礎看護学卒業研究Ⅰ」において学生が体験した看護実践能力の項目，岐阜県立看護大学紀要，8(1)3-10，2007.

（受稿日 平成 19 年 11 月 22 日）

（採用日 平成 20 年 1 月 22 日）